

# 子どもたちに 核兵器も基地もない 平和な日本と世界を

憲法・平和・核兵器廃絶  
メールニュース第14号  
2011年11月1日(火)  
全教・国民共同局

## なくせ！原発 安心して住み続けられる福島を！ 10・30大集会に、10000人以上が参加

色づき始めた林が広がり、コスモスが咲き乱れる福島市・四季の里で開かれた「なくせ！原発 福島大集会」。日本の原風景のような景色に、なつかしい気持ちが広がります。

「あの原発事故さえなければ、どんなにのどかな気持ちでここに立てたことだろう」との思いが強く湧き起ってきます。

10月30日、その福島大集会には、10000人を超える人々が、「原発なくせ」の思いを持って集まりました。貸切バスで参加した都教組をはじめ、青森・秋田・宮城・山形・新潟・埼玉・千葉・・・、全教・教組共闘の仲間の姿も多く見られました。



「かくれんぼしたい」と叫ぶ子

福島県立高教組はじめ現地の皆さんは、避難地区の自宅に戻れない方、サテライト校の生活でクタクタの方、学校で除染の先頭に立っておられる方、本当に大変な中で、この集会成功のために力をつくされました。福島の声を受け、運動をすすめましょう。

集会では、福島の方々から、怒りと不安の日々と、その思いが報告されました。

◆会津放射能情報センター代表の片岡輝美さん・・・「このお砂は触っていいの？」と聞く3歳の子ども。わが子のためにガン保険に入った母親。この通学路でいいのか。これを食べさせていいのか。一つ一つ迷いながら生活している。子どもの成長が楽しみな時期をこのように送らなければならない、福島の母親たちの思いを想像してください。全国に届けてください。

◆福島県農協中央会会長の庄條徳一さん・・・「福島に生まれ、福島で育ち、福島で仕事をし、福島で結婚し、福島で子どもを産み、・・・福島で孫やひ孫に囲まれこの世を去っていきたい」ある高校の文化祭で朗読された構成劇の一節。「福島で当たり前に生きたい」という子どもの夢を奪った事故を許せない。政府と東電の人災だ。



子どもの願いに参加者全員で「〇」(まる)！

◆浪江町町長の馬場有さん・・・  
事故からきょうで236日目。1日も早く除染して、元の生活に戻してほしい。東電は加害者なのに目線が上からだ。「補償するから書類を書け」と言う。県内に14000人、県外に7000人が避難している。この事態をつくったのは東電だ。国策として原発を推進した国の責任もある。東電と国とたたかっていく。心が折れないように生き抜いていきたい。

◆**飯館村村長の菅野典雄さん**・・・住民でつくりあげてきた村が、全村避難を余儀なくされた。腹がたって、悔しくて、憎らしくてしょうがない。ふるさとを取り戻すためにがんばりたい。「故郷は遠きにありて思うもの」という詩があるが、私は、まさに「故郷はそこにいて慈しむもの」という思いでいっぱい。ふるさとに戻る！ その応援をお願いします。

◆**前福島県知事の佐藤栄佐久さん**・・・事故で「日本もファシズムの原子力帝国になっていた」と思った。福島県民が自分の頭で考えようとしていたとき、そんなのは生意気だと、エネルギー一庁は22150戸に「原子力は安全だ」というビラをまいた。政府・学会・マスコミ一緒になって安全だとすすめてきた。その地域の皆さんは、今、避難民になっている。

◆**日本共産党の志位委員長**・・・福島の方々の願いは「3・11前の当たり前の生活に戻してほしい」ということにつきと思う。加害者である国と東電は、この願いにこたえる責任がある。まず、徹底的に除染し、子どもたちの命を守ること。次に東電は加害者として全面賠償を行うべき。費用は東電が負担するのは当たり前。同時に電力業界も共同責任があるから、「原発埋蔵金」19兆円を使うべきと声を上げよう。皆さんのお話を聞いて胸が詰まる。原発と人類は共存できない。「原発ゼロの日本」をつくるために頑張ろう。

その後、子どもたちが大声で、願いを叫びました。

**「お外でかくれんぼした～い！」「仙台に行った友達に会いた～い！」**

**「外で運動会やれたかった！」** 子どもたちの叫びに、会場参加者は大きな〇（マル）

をつくって応えました。子どもたちの声を受けとめた大人たちの責任は、子どもたちを放射能被害から守ること、そして、原発をなくすこと、そのために力を尽くすことです。今回の集会の大成功を力に、さらに運動を広げていきましょう。

## **「私たちの草の根の運動が大きな力となっている」と 肌で感じた訪問でした！…国連軍縮週間行動・大使館訪問記②**

国連軍縮週間のなか、日本原水協の大使館訪問のとりくみに参加しました。エジプト大使との懇談の様子を報告します。

エジプトのエルゼメティ新任大使は、前大使から続いている原水協との友好関係をしっかりと引き継いでおられ、私たちを「勇気ある行動だ」と、笑顔で歓迎されました。エジプトが81年にNPT核拡散防止条約に加盟しこれまでとりくんできた歴史や今後の目標など、1時間をかけて懇談しました。

大使は、エジプトは、中東でのNPT未加盟国であるイスラエルにこの20数年間、加盟するよう促しているが、イスラエルは自国が敵に囲まれた国である、核保有は自国の保護のためだと主張し続けている。だがそれは口実にすぎない。もしイスラエルがNPTに加盟していたなら、北朝鮮の核開発やインド・パキスタンの核実験も、もしかしたらなかったものだったかもしれない。エジプトはイスラエルがNPTに加盟するよう、核兵器を世界からなくすよう、これからも働きかけていく、と述べられました。

最後に私たちに、この“高貴な活動”をこれからも続け、エジプト大使館にもまたいつでもいらしてくださいと話されました。

私たちの草の根の運動が大きな力となっていると改めて肌で感じ、運動をさらに強めていきたい、と思った訪問でした。

(全教本部書記・芹田さん 10/26)